私本太平記(七)

吉川英治文庫

昭和50年7月1日　第1刷発行
昭和54年2月15日　第6刷発行

吉川英治文庫118
私本太平記(七)
400円

著者　吉川英治
編集　株式会社 六興出版内
吉川英治文庫刊行会
発行者　野間省一
発行所　株式会社 講談社
東京都文京区音羽2—12—21
振替東京8—3930
電話東京03(945)1111(大代表)
印刷所
製本所　凸版印刷株式会社
(落丁本・乱丁本はお取りかえいたします)
0193-421182-2253 (0)

Printed in Japan
©吉川文子　1975
(文2)

講談社文庫

私本太平記（七）

講談社

目次

風花帖（つづき）　七
筑紫帖　六一
湊川帖　三六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

私本太平記

(七)

風花帖（つづき）

勾当の内侍

ちょうど、尊氏の流亡軍が、筑前芦屋ノ浦へつき、茲に初めて九州の地をふんでいたころ——

その二月二十九日。

都では改元の令があった。爾今、年号を、

延元

と改められ、前ノ大納言花山院亭の仮内裏では、発布の神事がおこなわれていた。また同日を期して、このたびの大戦大勝の賀をのべる貴顕の馬やら車やらが混み合って、三条洞院の四ツ辻に、仕丁たちの間で〝くるま喧嘩〟が起るほどな騒ぎだった。

やれ、車をぶつけたとか。

車のあるじが礼を欠いたとか。

車副の侍から、牛飼の童まで、みな気が立っているのである。そしてみな戦勝の驕りに酔っているのでもある。

なにしろ、尊氏の筑紫隠れは、大きな反映をこの洛中へ投じていた。それを「尊氏退散」とさえ言って、ふたたび、花の都が地に降りたような景観を俄にしていたのだった。

しかし、ほんとの姿にはまだまだ遠く、いたるところは焼け跡だらけな洛内なのだ。――その中へ過日来の兵庫からの凱旋軍が、何万となく入りこんで、各〻勝手屯に、空地や空館を占めてごッたがえしているし、日が暮れると婦女子は一人で歩けぬような戦勝の都である。――だが内裏へ参内するほどな人々は、公卿といわず、武将といわず、相見るたびにこう祝福しあっていた。

「やあ、おめでとう」

「いや同慶、同慶」

ここにたれよりも百戦の功を燦と身にあつめていたものは新田義貞で、きのう今日の彼は稀世の名将みたいにあつかわれていた。――ソノ日義貞朝臣ニハ、天下ノ士卒ノ将トシテ、降人数万ヲ後ニ召シ具シ、花ノ都ニ帰リ給フ――と彼の凱旋をたたえた古記はそのまま義貞の風采と見てもよかろう。年は三十のなかば、元々の美男でもある。

そのうえこのほど官位も、

左近衛ノ中将

に昇され、弟の脇屋義助は、右衛門ノ佐となった。

彼の得意時代が今や来たかのようである。今日も親しくみかどに召されて「以後、山陰山陽十六ヵ国の事を管領せよ」との朝命を拝して御座のあたりをさがって来たところだった。

近く、義貞はまた、尊氏追討の軍をもよおして、再び西下しなければならぬ。山陰山陽十六ヵ

国にわたる軍令権のみゆるしは、その挙にあたっていちいち都へ使いを往返していてはまにあわないので総てをゆだねられたものではあった。けれどもこれもまた左中将義貞の名をいよいよ三軍のうえに重からしめるものであることは言をまたない。

「ここ七日以内に」

と、義貞はその発向の日どり迄を今日はおちかいして来たのである。一族将兵たちの休養もだが、自身もまた去年いらいの血臭い生活をこの日に少し憩いたかった。……で、君からいただいた賜酒に染まって、頬にはほのかな色が出ていた。憩いの色といってよかった。

「お。……左中将どの」

すると、一簾の蔭からさし招くものがあった。たれかとみれば、これも近ごろ勲功の臣として、内裏でも、また外でも、かくれない羽振りの人、千種の頭ノ中将忠顕だった。

「左中将どの。一度折入って、おはなし申したい儀もあるが」

「うけたまわりましょう。ここでよろしければ」

「いや、ここではちと」

千種忠顕は間を措いて。

「尊氏追捕のために再度の御発向もおひかえあること。お忙しさは察しるが、貴邸へ伺うてはいかがであろうか」

「お待ちする」

「今宵にでも」

「けっこうです。ただ近来家中も急増して手ぜまのため、旧居は弟の義助にゆずり、それがしは

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

高倉ノ辻にいますが」
「御新亭の方か」
「いや新居などではありません。もと足利直義のいた旧館をそのままつかっているわけで」
「ならば人目も遠くてなおよい都合だ。じつは自分のほかにもひとりお連れしてまいるお方もあるしの」
「あなたのほかに」
「む。それは、女性のお方とだけを、ここでは、おうちあけ申しておこう。くわしく言ってしもうては色も香も浅くなる。ま……いずれ晩に」
忠顕も忙しげだった。右弁官の局から迎えにきた蔵人と袖をつらねてすぐ立ち去り、義貞はそのまま退出して、高倉ノ辻へ帰った。
私邸に帰れば彼を待つ客や軍務はここにも山とつかえていた。〝時の人義貞〟にまたたく春の半日は暮れてしまう。「所用あれば、あとの時務は一さい明日聞く」と表方へいいわたして、湯殿の湯けむりに浸ったのがもう約束の宵だった。そろそろ千種忠顕が見える頃である。
「折入ってとは？」
千種とは、刎頸の仲だ、悪い事とはおもわれない。
それよりも、その千種が連れてくるといった女性とは誰なのか。そのことのほうが彼には昼から気がかりだった。思い当りが無いでもなく、あるいはと、心が浮いてくるからでもある。
左近衛ノ中将に叙す
との恩命に接したのは、さきごろ兵庫合戦でまだ在陣中のことだったが、凱旋の日、さっそく

それのお礼とご報告とをかねて参内し、たいそう面目をほどこしたのみならず、宮中の慣例にもないほどな、おもてなしを賜わったことがある。

後醍醐は御酒がおつよい。諸卿はみな知っているが、義貞は正直におあいてしていたので、ついに酔いつぶれてしまったらしく、やがてふと気がついたときは誰もみえない朧夜の一殿だった。のみならず、目をさますとすぐ楚々と薬湯をささげて来てやさしく気分を問うてくれた一女性がある。

更衣とか典侍とかよばれる深宮の女性にちがいない。いよいよ恐縮して、義貞は半ば夢心地で薬湯をおしいただいたが、あたりの花明りに、ふと、そのひとの顔を見たせつな、

あ、草心尼？

と、叫びかけて、おもわずはしたない驚きの目をしばらく彼女の花顔から離しえなかったものだった。それほど彼女の眉目は若き日のかの草心尼に似て美しく眩くもあった。

忘れかねて。

そのご、このことを忠顕にもらすと、忠顕がまたそれを、みかどのお耳へ達したらしく、みかどのおことばとして「――左中将がそれほど忘れかねる女なら、左中将へつかわしてもよいの」と、仰せられたということだった。――それもまた煩悩の身には、忘れかねるみことばではあった。

まさか。

よしんば、帝がほんとにそう仰っしゃったにしろ、女を賜うなどとは、かりそめのお戯れにちがいない――

それとは義貞も心で打消してはいたが、やはり多少はそぞろめいて、その折、千種忠顕から女の名やら素姓などは訊きさぐってみたのであった。――で、知りえた所によると、彼女は一条行房の妹で、宮中での御所名は、

勾当ノ内侍

と呼ばれているという。

内侍とあるからにはもちろん御寝に侍る御息所や更衣にならぶ女性のひとりにちがいない。高嶺の花だ、訊かぬがましであったよと、義貞はなおさら失望したものだった。

けれど、栄達と名声と、彼の昨今には、彼を満すものが充分だった。さらには、尊氏追討のもう一段階もひかえている。彼の失意も空洞とまではならずに忘れかけていた。そうして、せっかく忘れかけていたものをである。またも思い出させるなどはあの忠顕も罪がふかい。――彼が言ったこよいの同伴者とは誰なのか。――それに代るべき女でも連れて来る気か。でなければ、まったく何かべつな用か。

「……」

湯ぶねのうちで、義貞はうっとり思い耽っていた。外はおぼろ夜らしく、湯殿の窓にも花の影がサヤサヤあった。

ふるさとの花、世良田ノ館の桜もふとおもい出されてくる。恋が成っても破れても、男には忘れえぬ女が生涯に一人はかならずあるというが、それが自分には草心尼であったかと、義貞はいま知った。

その人と、勾当ノ内侍とは、瞼のうちで、けじめもつかぬほどよく似ている。まだ髪をおろさ

ぬ若後家ごろの草心尼と――。

いや草心尼といえば。つい先頃も彼には妙な事があった。

摂津の戦場で、兵に捕われて来た旅の母子があり、見ると、それが彼女と覚一だったのだ。

しょせん尊氏は亡びる、尊氏を頼って行っても行くすえ頼む人にはなるまい。自分の陣にいたがよい、と――それはもうむかしの美しさは褪せた尼なので色恋などでなくいたわってやったものだが、無断でいつか見えなくなっていた。おそらくは以後の戦場にまき込まれたか、路頭に迷っていることだろう。

「……殿。……殿」

湯殿の外の声だった。

「新兵衛か」

「は。新兵衛にございますが」

「いま出る。いますぐ」

「お耳へまでちょっと」

「千種どのが見えたのであろう」

「さようで」

「いいつけておいたように離亭のほうへお通し申しあげておいたろうな」

「はい」

「おひとりか」

「いえ、女性の御方と」

「老女か。お若い方か」
「み車を降りさせ給うたとき、よそながら拝しただけでございますが、花うるしのきらやかな女御車、おん姿といえば、夜目にさえ薫やかなお方のようにぞんじられました」
「ふ……ム」
義貞は内で体を拭いていた。壮者のゆたかな肉塊は、拭くそばからまたすぐ汗になってくる。用意されていたことなので、主客はすぐ酒になっていたが、義貞はまだ、忠顕の来意がとんとわかっていない。客は忠顕だけで、連れていると聞いた女性は、この場には見えないのである。
「いや、おひきあわせはあとにいたそう。その前にちとすましておかねばならぬおはなしもありますから」
と、問わぬ先に忠顕のほうから言った。そのひとは、どこか別室にでもおいて、まず用談を先にとしているらしいのである。
「仰せください」義貞はさいそくした。「――ここは離亭です。呼ぶまではだれも来るなと、家臣共も遠ざけてございますれば」
「じつはの……」と、語気を凝らして「佐々木道誉の降参についてじゃが」
「ほ。そのことなら義貞も聞いていました。さきごろ大江山より道誉が使いを出して、あなたの御門へ、降参のおとりなしを、すがって来たとか」
「いやこの忠顕だけに来たわけではない。准后（廉子）のおん許へも懇願の使いを出して、るる、恭順のこころを陳べ、前非を悔いておる態なのだ」
「ははは。およしなさい、およしなさい」

義貞は手を振った。
「あの道誉が、いまさら前非を悔いたなどとは、笑止千万。なんで真顔に耳が仮せましょうか」
「なるほど。左中将どのには、あくまで御反対と聞いていたが」
「されば宮中にても御内議ありとうかがったせつ、義貞は強う不本意でござると、申したことはたしかです」
「お嫌いかの。あの人物は」
「さような感情からではありませぬ。去年、海道諸所の合戦では、二度まで這奴は寝返りをやっておる。およそ廉恥を知らぬ男でしょうが」
「しかし彼のみではない。いまの武将は」
「いやいかに道義が廃った今でも彼のごときは全く稀れです。稀れな鵺です。箱根合戦の後陣から裏切って、この義貞を死地におとしたのも彼の才覚。またぞろ尊氏の非運をみるや、尊氏をすてて兵庫から脱陣したものの、京を通らねば近江へも行くことならず、途中の大江山で立ち往生をしているのでしょう。……そしてくるしまぎれに、准后へすがり、またお気のいいあなたをだまそうとしているのだ」
「さ。それで困る。元々、佐々木道誉なる者は、元弘の年、みかどが六波羅の獄から隠岐へ流され給うた日の出雲路まで、その御警固にあたっていた人物だ。――さるがゆえに、みかども准后の御方も、彼は情けある武士よと今もって信じておられる。また深くそのせつの道誉の忠義をお憶えあらせられて、ここは助けとらせよとの叡慮でもあるらしい」
「……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong